

事項	斑点米カメムシ類（カスミカメムシ類）による加害時期別の被害粒の特徴		
ねらい	斑点米カメムシ類の加害時期により玄米の褐変程度は変化し、登熟が進むにつれてカメムシに加害されても褐変しづらくなり、特に登熟終期の加害では褐変せず白斑粒となることが観察されたので、防除対策上の参考に供する。		
指導参考内容	<p>1 加害時期別の玄米の褐変程度の変化</p> <p>(1) 穂揃5～20日後頃 (出穂後の積算気温237～612℃) 褐変したしいなや頂部褐変粒が主体で一部、側部褐変面積の大きい被害粒が見とめられる。特に側部被害粒は褐変部が陥没するなど、変形を伴うことが多い。</p> <p>(2) 穂揃20～35日後頃 (出穂後の積算気温612～924℃) 側部褐変粒が主体で、褐変面積も大きく、発生量も多い。したがってこの時期の加害がもっとも被害が大きい。側部に褐点だけが認められる粒が散見される。</p> <p>(3) 穂揃35～45日後頃 (出穂後の積算気温924～1124℃) 側部褐変粒が主体だが、褐変面積は小さいものが多く、褐点だけが認められるものや、わずかに褐変を伴う白斑粒が見られる。</p> <p>(4) 穂揃45日後以降 (出穂後の積算気温1124℃以降) 側部褐変粒がわずかに見られるが、白斑粒や白斑の一部に褐変を伴うものがほとんどとなる。</p>	 <p>頂部褐変粒</p> <p>側部褐変粒（変形）</p> <p>側部褐変粒（大）</p> <p>側部褐変粒（中）</p> <p>側部褐変粒（小）</p> <p>側部褐点</p> <p>褐変を伴う白斑粒（左：順光、右：透過光）</p> <p>白斑粒（左：順光、右：透過光）</p>	
期待される効果	斑点米カメムシ類の防除対策、被害診断に利用できる。		
利用上の注意事項	低温で稲の登熟が遅れる場合は、時期がずれる可能性がある。		
問い合わせ先（電話番号）	農林総合研究所 病虫部（0172-52-4314）	対象地域	県下全域
発表文献等	平成25年度 試験成績概要集（農林総合研究所）		

【根拠となった主要な試験結果】

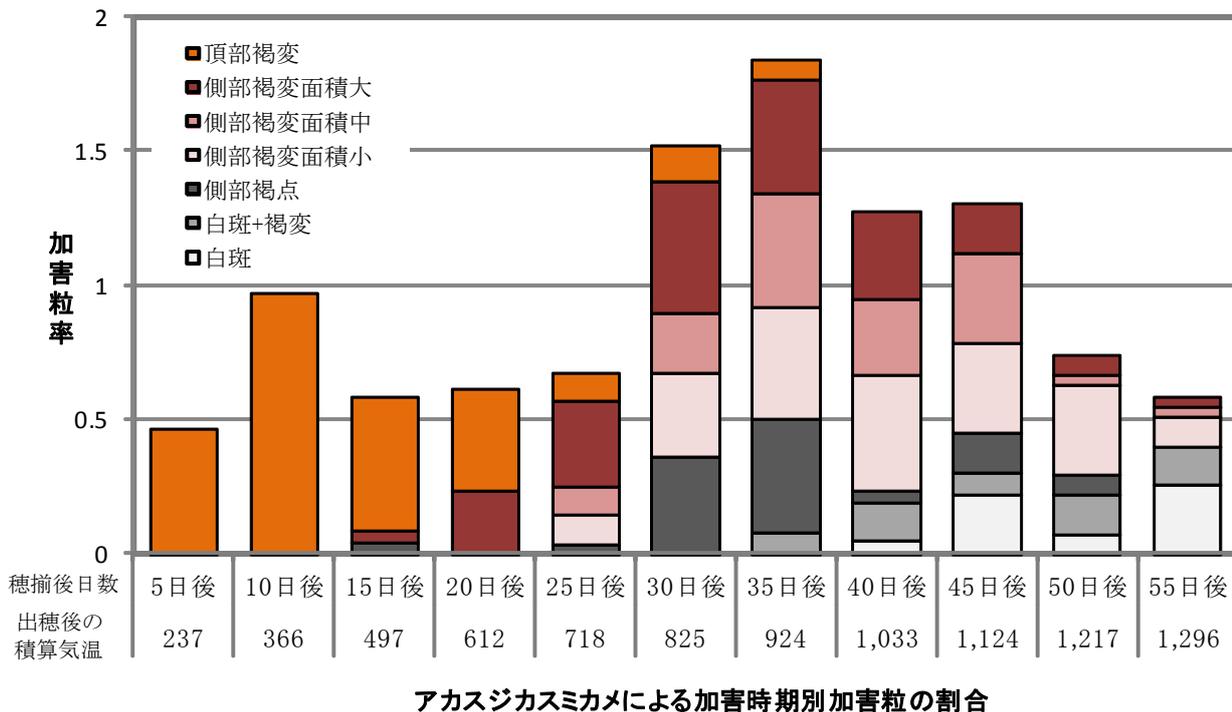
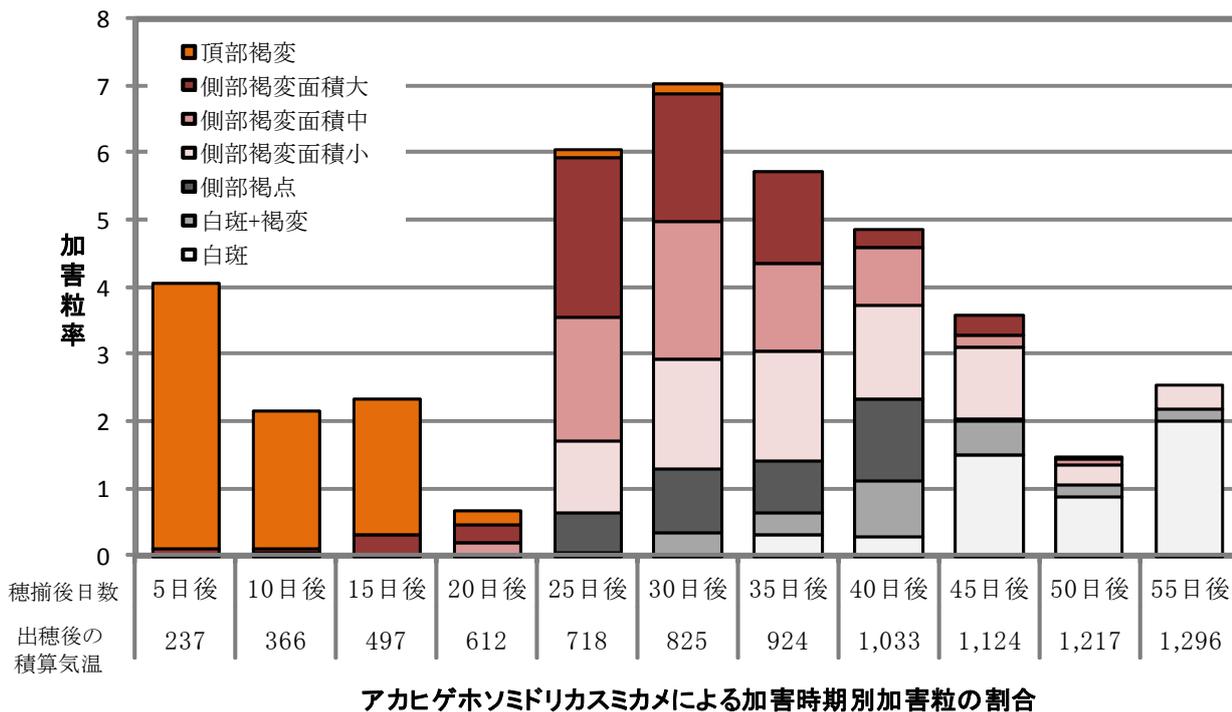


図1 斑点米カメムシ類の加害時期の違いによる褐変粒形成の推移（平成25年 青森農林総研）

(注) 1 品種：まっしぐら

2 方法：穂揃直後に穂に袋をかけた後、穂揃5～55日後の各時期に袋内に斑点米カメムシを放虫し、3日間穂を加害させた。穂揃60日後に加害させた穂を切り取り、乾燥調整後、実体顕微鏡下で袋毎の褐変粒を褐変の程度別に計数し、混入率を調査した。

3 放飼虫の由来：平成24年に所内の雑草地で採集したものを、小麦の芽出し苗を餌として26℃16時間日長で飼育、増殖したものを使用した。